発表を準備するための参考サイト

1. リンク集

1-1. 一般

実践女子大学図書館図書･雑誌探索ページ http://www.jissen.ac.jp/library/frame/

国内外のさまざまな情報へとアクセスできる総合的なリンク集として定評あり。

2. データベース

2-1. 本学綜合図書館から使用できる有料データベース（学内のみ、同時アクセス数: 1）

大阪産業大学綜合図書館 http://www.osaka-sandai.ac.jp/tosho/

Japan Knowledge　百科事典を中心に、英語辞典、現代用語などの辞・事典類など 30 以上のコンテンツから、一括検索ができる。音声、映像などマルチメディアを駆使した情報、複数コンテンツの横断検索が特徴。

聞蔵Ⅱビジュアル　朝日新聞オンライン記事データベース　1945 年から当日までの朝日新聞記事すべてが検索可能。1945 年から 1984 年までは縮刷版の紙面イメージが表示され、1985 年以降は、東京本社および各支社発行の最終版から各都道府県の県庁所在地で発行する地方版（沖縄を除く）までを収録。2005 年 11 月以降は新聞切抜きイメージで写真や図表が確認できる。さらに、AERA、週刊朝日、知恵蔵（新語辞典）のほか、人物データベースも検索できる。

人物レファレンス事典　その人物がどの人物事典・百科事典・歴史事典に掲載されているかを調べることができる人物事典の総索引。

BOOKPLUS(レファレンスクラブ)　1926 年より現在までに出版された国内の図書情報データベース。1986 年以降の本には、内容・目次情報などが収録されている。

MAGAZINEPLUS　国内最大の雑誌・論文情報データベース。一般誌・総合誌・ビジネス誌も収録。

2-2. 一般文献

Webcat Plus http://webcatplus.nii.ac.jp/

国立情報学研究所が運営する、全国の大学図書館・研究機関所蔵の図書・雑誌の目録データベース。「連想検索」では、キーワードから関連性の高い単語を抽出し、それを含む図書をもれなく探し出す検索方法で、自分の関心に適した図書を見つけることができるが、ヒット数が多く使いやすいとは言えない。「一致検索」では、書名や著者などのキーワードを入力して検索し、必要な図書をピンポイントで見つけることができます。

Webcat http://webcat.nii.ac.jp/

上の「Webcat Plus」の原形となったサイトで、図書・雑誌の所蔵図書館がわかる。ヒットした文献は、本学図書館のレファレンスカウンターで手続きすれば、取り寄せることができる（図書は現物、雑誌は論文のコピー）。非常に便利！

NDL-OPAC http://opac.ndl.go.jp/

日本で最大の蔵書をもつ国立国会図書館の蔵書検索システム。

一般資料の検索/申込み　図書、雑誌新聞、電子資料、和古書・漢籍、博士論文、地図、音楽録音・映像資料などの検索が可能。「登録利用者」になれば、コピーの郵送サービスも利用できる。

雑誌記事索引の検索/申込み　雑誌に掲載された記事・論文について、タイトル・著者名などから検索、コピーの申込みができる。大変便利！

その他、国立国会図書館のサイトには、全国約 1300 機関の所蔵新聞が検索できる「全国新聞総合目録データベース」（http://sinbun.ndl.go.jp/）、中国語・朝鮮語で書かれた図書・雑誌・新聞の図書が検索できる「アジア言語 OPAC」（http://asiaopac.ndl.go.jp/）など、さまざまな便利なデータベースが用意されている。

Amazon.co.jp http://www.amazon.co.jp/

現在流通している本を探し出すには最も使いやすいネット書店サイト。もちろん直接購入できる。本学ブックセンターで取り寄せれば 10%割引で購入できる。

大阪府立図書館 http://www.library.pref.osaka.jp/

大阪府立の図書館には「中央図書館」と「中之島図書館」の 2 つがあり、とくに産大の近くにある中央図書館（近鉄東大阪線「荒本」駅下車）は、日本で最大規模の図書館の一つ。Web 上では両図書館の蔵書検索のほか、近隣図書館などの横断検索もでき便利。ぜひ一度、訪問したい。

日本の古本屋 http://www.kosho.or.jp/

全国古書籍商組合連合会が運営する日本最大の古本検索サイト。2400 軒の業者が参加。品切れ・絶版書などの入手に役立ちます。

3. 辞典・事典

3-1. 国語辞典

goo http://www.goo.ne.jp/

代表的なサーチエンジンの一つだが、国語辞典・現代用語辞典を同時に検索できるので便利。藤永の HP（http://www.he.osaka-sandai.ac.jp/~funtak/）に検索窓あり。

3-2. 百科事典

ネットで百科＠Home http://ds.hbi.ne.jp/netencyhome/

平凡社『世界大百科事典』のインターネット検索サービス。3 分間無料利用可能。

【参考文献】

小笠原喜康『インターネット完全活用編　大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書、2003 年

その他、藤永のウェブサイトのリンクのページで紹介しているサイトも参照のこと

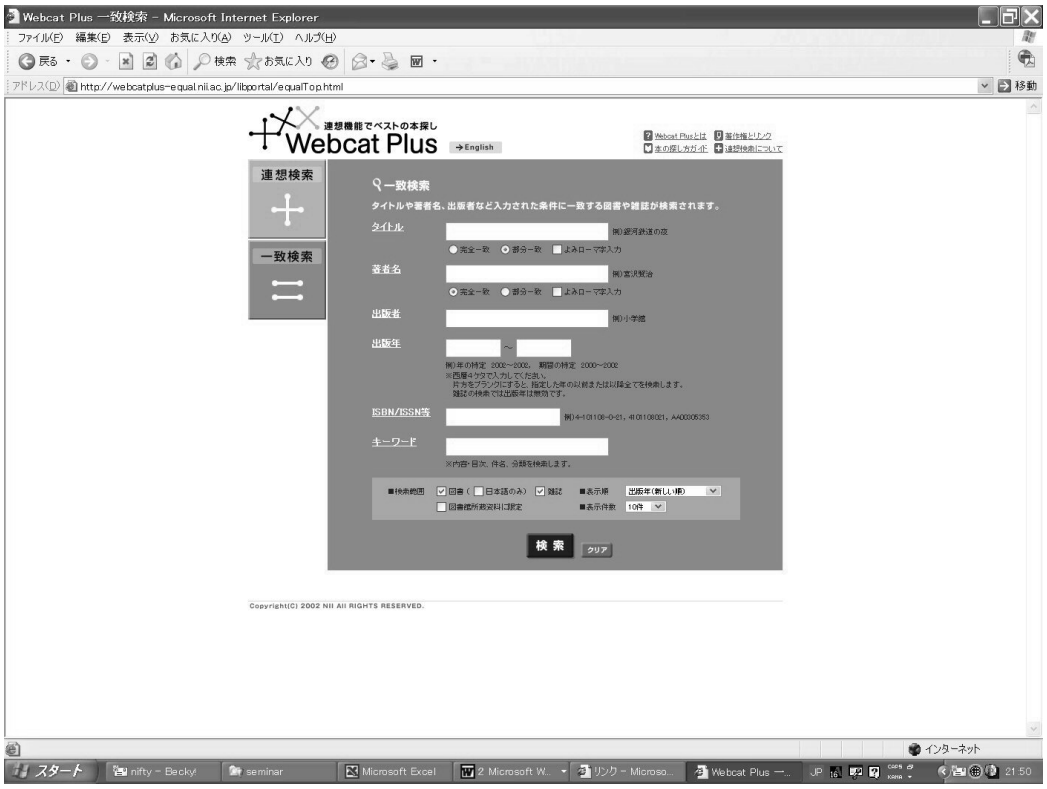
http://www.dce.osaka-sandai.ac.jp/~funtak/link.htm

大阪産業大学綜合図書館

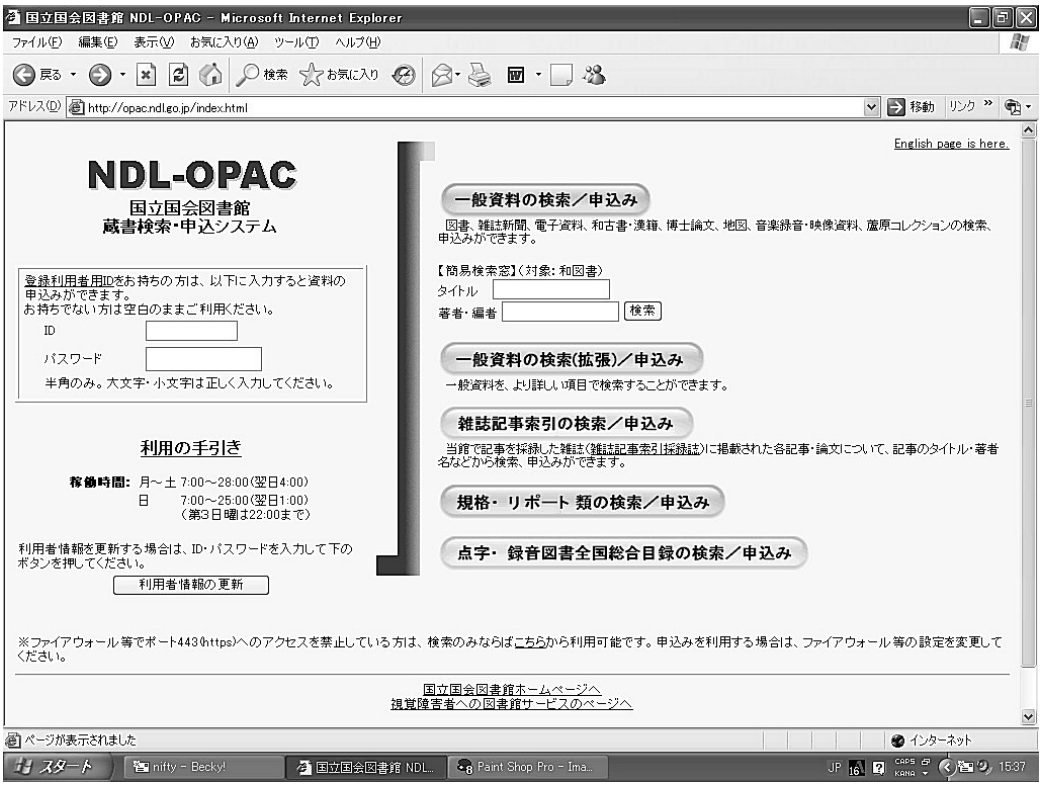
Japan Knowledge

聞蔵Ⅱビジュアル　朝日新聞オンライン記事データベース

Webcat Plus



NDL-OPAC



実践女子大学図書館図書･雑誌探索ページ

大阪府立図書館

大阪府立図書館ホームページ - Microsoft Internet Explorer
http://www.library.pref.osaka.jp/
大阪府立図書館
OSAKA PREFECTURAL LIBRARY
4月25日(月)午後6時から9時まで
電気工事のため、ホームページを一時中断します。ご了承ください。
調査相談
蔵書検索
横断検索
府内の図書館の蔵書を一括検索
大阪府立中央図書館
生涯学習時代の大型図書館
利用案内
地図
こどものページ
障害者サービス
ライティホールの利用案内
中央図書館のホームページへ
大阪府立中之島図書館
ビジネス支援、大阪資料・古典籍中心の図書館
利用案内
地図
ビジネス支援サービス
おおさかページ
中之島図書館のホームページへ
新着図書
開館日カレンダー
お知らせ
催し物のご案内
資料を探す
コレクション
府立図書館の概要
リンク
大阪府教育委員会
大阪府視聴覚ライブラリー
大阪府のホームページへ
大阪府教育委員会のホームページへ
大阪府立中央図書館
〒577-0011 東大阪市荒本北57-3
TEL 06-6745-0170(代表)
大阪府立中之島図書館
〒530-0005 大阪市北区中之島1-2-10
TEL 06-6203-0474(代表)
ページが表示されました
インターネット
スタート
nifty - Becky!
リンク - Microsoft Inte...
大阪府立図書館ホー...
Paint Shop Pro - Ima...
15:40

【第1回発表レジュメのサンプル】

タイトル

発表の日付
学籍番号　氏名

はじめに

発表のねらい、この記事を選んだ理由、必要な予備知識の説明など、記事の要約に入る前のイントロダクションとして必要なことがらを説明する。

記事のデータ

以下のような順序と形式で示す。
（執筆者名）「見出し」『新聞名』日付、朝夕刊別・面数

内容の要約

箇条書きで簡潔に。
コツ：まず 1 段落ごとにキーワードを探し、ポイントを書き出してみる。必要に応じて適宜 2 ～ 3 段落分をまとめてみる。

まとめ

感想や、疑問に思ったこと、分からなかったことなど。
記事の中で、今後掘り下げて調査したいテーマも考えてくる。

留意事項

①発表内容は基本的に記事の要約だが、内容を説明するためには当然、記事の内容をきちんと理解していなければならない。分からない言葉、固有名詞などは必ず調べておくこと。
②１回目の発表は２回目の発表に連続するものであることを充分認識して記事を選択すること。その意味では逆説的だが、少し分からないところがあったほうがよいとも言える。

朝日 070411 朝(25)

日新聞　第3種郵便物認可

昭和モノ語り 上

帽子

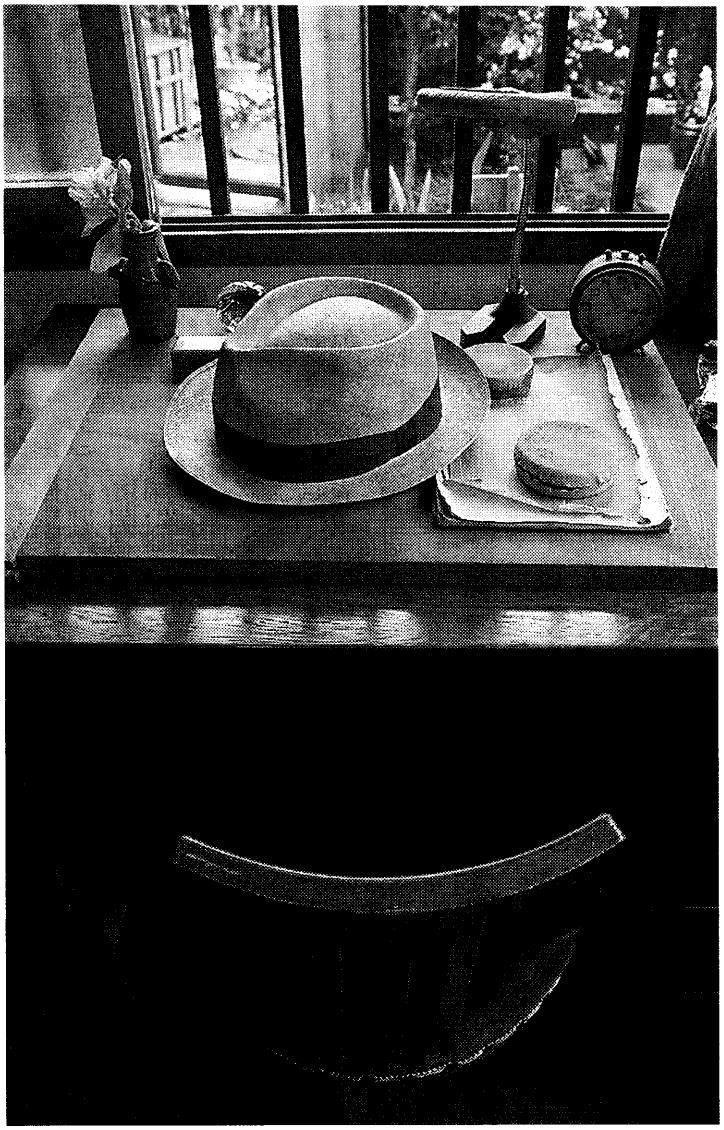
男の「制服」、規律の象徴

「戦前の男は全員帽子をかぶっていました」

晩年、戦前の昭和の風俗の実態を語り続けた名コラムニスト、山本夏彦は著書、『誰か「戦前」を知らないか』（文春新書）の中で断言している。

作家、山口瞳もこう書く。「（戦前まで）帽子をかぶっていないのは相撲取りぐらいのものだ。（中略）男は帽子をかぶるべきものである。いや、ある時代までそうであったのだ」（『礼儀作法入門』新潮文庫）

戦前の古い写真やフィルムを見ると、特に、都市の男性のほとんどが帽子を頭に載せている。中折れ帽、パナマ帽、カンカン帽、鳥打ち帽、学生帽……。



東京帽子協会が発行した『東京の帽子百二十年史』の昭和時代前期の文章は語る。敗戦までの昭和時代前期は「帽子業界の黄金時代と激動時代」であり、「昭和の初め、帽子は完全に庶民生活の一部になっており、帽子を被らなければ大人は外出もできないほどでした」。昭和12年ごろ東京に住む人々は少なくとも半ダース以上の帽子をもっていた、という驚くべき推定数字も載っている。

でも、戦後、男の帽子が消えてゆく。『百二十年史』の記述も一転、「帽子離れ」といった重苦しい記述が増えてくる。

△　△

昭和28年公開の小津安二郎監督の名作「東京物語」は、ほぼ同時代を背景に、老夫婦が尾道から東京にいる子供を訪ねる物語だ。男性も多数出て来るが、帽子を被っているのは、主演の笠智衆と彼の友人を演じる東野英治郎と二人の老人だけなのだ。まるで、古い風俗の代表が帽子といった風でもあった。

先日亡くなった植木等の昭和30年代のトレードマークの一つは、ステテコ姿にカンカン帽。すでにその時代の「変なおじさん」の象徴になっていた。渥美清演じる「寅さん」も、帽子を被り続けていた。それは、時代から一歩身をおいた香具師を描く演出の一つにも見えた。

なぜ男の帽子が時代の前面から退いたのだろうか。

明治になって初めて洋装に接した日本人が本格的に洋服を着始めたのが戦前の昭和時代だった。『暮らしの世相史』（中公新書）などの著書もある社会学者の加藤秀俊さんは「洋装は早くから男性中心で進んだ。だが外出は洋服でも、家では和服。女性は、ほとんど、いつも和服でした」と話す。

洋装の大規模な導入のきっかけは軍服だった。それに学校の制服。兵役があり、進学の機会にも恵まれた男性がまず慣れたと、加藤さんは考える。いずれも帽子がセットになった服だった。同様の感覚で背広に着替えても、帽子を被ったのか。新興「大国」として西欧紳士へのあこがれもあったのだろう。ともあれ、洋服はまだ自在に着こなせぬ「公」の場の「制服」だったともいえる。

△　△

しかし、戦後は、それが一挙に崩れる。何しろ「自由」が価値なのだ。女性の洋装化も一挙に進む。昭和30年代に入り、男の帽子は街であまり見なくなる。最後の牙城だった中学・高校の制帽も40年代半ば以降、廃止が続いた。いつのまにか、洋服は「制服」でなく、「流行」「消費」の主役や、自らの「センス」「思想」を顕示する指標となった。今、街でニットなど様々な帽子を被った若い男の子たちを見かける。それは、自らの趣味の主張の一環でしかない。

「最後に残ったのは、自衛隊、警察、消防、鉄道などの制帽だけでしょう。帽子はどこか、規律の象徴でもありました。帽子が消えた理由の一つには、戦後、規律というものが、日本の社会から、消えていったことの裏返しではないでしょうか」と加藤さん。

またそれは、「昭和」が、明治にスタートした洋装＝西欧文化を、生まれながらの衣装のように自然に着こなすに至る完成期だったことの証しだろう。

最後にもう一つ。戦前・戦後を通じてずっと帽子を被り続けた人物がいた。他ならぬ昭和天皇だ。戦前は、「神」にして「大元帥」。軍帽姿だった。戦後は「人間」にして「象徴」。人々の歓迎に、ソフト帽などをふって応える天皇の姿は、みんなの記憶に強く焼き付いている。

この帽子の違いもまた「昭和」の実相でもある。

（編集委員・四ノ原恒憲）

◇　◇

今年から29日の祝日の名称が「みどりの日」から「昭和の日」と変わる。そのことの是非は、ひとまず置くとして、では、60余年にわたった「昭和」という時代はなんだったのか。身近な衣食住のモノを手がかりに考えてみる。

戦前から戦後間もなくまで男性がよく被っていた帽子＝遠藤真梨撮影、協力・昭和のくらし博物館（東京都大田区、03・3750・1808）。月曜休館。

帽子と近代日本

2007/04/23

05PXXX　藤永　壮

はじめに

今年から 4 月 29 日の祝日の名称が「みどりの日」から「昭和の日」へ変わる。4 月 29 日はもともと昭和天皇の誕生日であったからだが、この機会に「昭和」という時代がなんだったのかを考えるという企画に興味をもち、この記事を選んだ。あまり意識してこなかった帽子という題材を通じて、近代日本社会の変化の様子を紹介したい。

記事のデータ

「昭和モノ語り　上　帽子　男の「制服」、規律の象徴」『朝日新聞』2007 年 4 月 11 日、朝刊 25 面

内容の要約

1. 戦前の帽子ブーム

・戦前の日本人男性はほとんど帽子をかぶっていた。（山本夏彦、山口瞳）
・敗戦までの昭和前期は「帽子業界の黄金時代と激動時代」
・戦後は男の帽子が消えていく。

2. 洋装導入と帽子

・戦後、帽子は古い風俗の代表、「変なおじさん」の象徴（「東京物語」、植木等、寅さん）
・日本人が本格的に洋服を着始めたのは戦前の昭和時代
・洋装の大規模導入＝軍服、学校の制服→帽子がセット
　洋服はいまだ「公」の場の「制服」

3. 帽子が消えた理由

・戦後、帽子の衰退←洋服は「流行」「消費」の主役、「センス」「思想」の指標
・規律の消失→規律の象徴であった帽子も消える
・「昭和」は洋装＝西欧文化を自然に着こなすに至る完成期
・戦前・戦後を通じて帽子を被り続けた昭和天皇：軍帽からソフト帽へ→この違いも「昭和」の実相

まとめ

戦前流行した男性の帽子が、戦後に消えていった理由が興味深かった。制服の一部からファッションの道具へと、帽子を被るという行為の意味が変わったことに時代の変化を感じた。

このようなモノは、ほかにないのだろうか？　記事の中で紹介された『暮らしの世相史』という本に興味をもったので、2 回目の発表ではこの本を手がかりに、時代の変化が衣食住の流行にどのように反映しているのかを紹介したい。

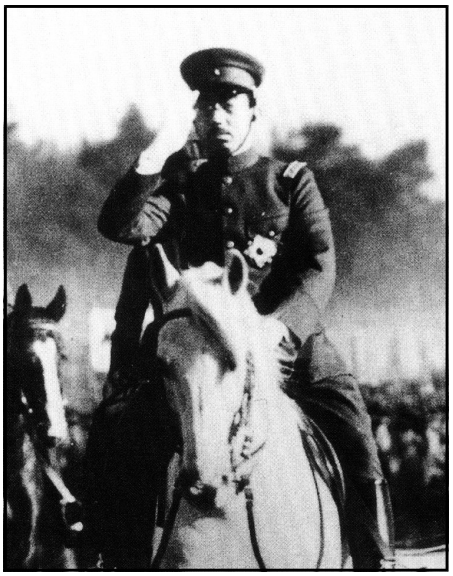
調査しておきたい項目

山本夏彦　山口瞳

帽子の種類：中折れ帽、パナマ帽、カンカン帽、鳥打ち帽、学生帽、ソフト帽

小津安二郎　「東京物語」

昭和天皇の写真



山口瞳　やまぐちひとみ（1926-1995 ）

小説家、随筆家。東京生れ。国学院大卒。鎌倉アカデミーで、歌人吉野秀雄とドイツ文学者高橋義孝を師とする。寿屋（現、サントリー）宣伝部でコピーライターとしての才能を発揮。《婦人画報》に連載の《江分利満氏の優雅な生活》で、第 48 回直木賞を受賞、作家生活に入る。代表作に《江分利満氏の華麗な生活》、戦中派の自嘲を描いた《マジメ人間》、自身が住む国立市住民の人情を描く《わが町》《居酒屋兆治》、中年作家の暗澹たる内部を描いた《人殺し》などがある。《週刊新潮》連載のエッセー《男性自身》は、20 年を越えた。

小津安二郎　おづやすじろう（1903-1963）

映画監督。東京生れ。三重県、宇治山田中学卒。1923 年松竹に入社。初め喜劇映画を作り、次いで《生れてはみたけれど》（1932 年）や《一人息子》（1936 年）等、小市民の悲哀を描いた映画で評価される。第 2 次大戦後は笠智衆と原節子を主演に迎えた《晩春》（1949 年）、《麦秋》（1951 年）、《東京物語》（1953 年）が名高い。遺作は《秋刀魚の味》（1962 年）。脚本家野田高梧〔1893-1968〕、カメラマン厚田雄春（ゆうはる）〔1905-1992〕らのスタッフとともに〈小津調〉と称される独自の世界を生み出した。特に、カメラを低い位置に固定して撮影される厳密な画面構成に特徴がある。題材などの面で、生前は海外での理解はむずかしいと思われていたが、死後国際的評価が高まった。

東京物語　とうきょうものがたり

小津安二郎監督の松竹映画。1953 年公開。脚本野田高梧、撮影厚田雄春（あつたゆうはる）。尾道から上京した老夫婦（笠智衆、東山千栄子）を実の子どもたちは厄介者扱いし、戦死した息子の嫁（原節子）が親身に面倒を見る、という筋立てによって家族の崩壊するさまを描き出した。終盤の東山千栄子の死の場面、一人取り残された笠智衆と原節子が語る朝の場面はとりわけ名高い。

カンカン帽　かんかんぼう

頭頂が平たくまわりにつばが付いた麦わら帽で、堅く編んで作られる。カンカン帽は日本での呼称。語源は麦稈（ばつかん）（麦わら）から名づけたとか、たたくとカンカンと音がするからなどの説があるが、定かではない。大正半ばより昭和の初めに、洋服・和服を問わず男子の夏帽子として用いられた。第 2 次大戦後は年長者以外はほとんど用いなくなった。ボートに乗る人がかぶったとの意からイギリスではボーター boater、フランスではカノティエ canotier と呼ぶ。19 世紀末より登場する男女のセーラー・ハットやミッドシップマン型麦わら帽も、このカンカン帽の一種である。

ソフト帽　ソフトぼう

中折（なかおれ）帽とも。柔らかいフェルトで作った、平常かぶられる帽子で、シルクハットや山高帽などかたい帽子に対するものをいう。ブリム（つば）の両脇が少し巻き上がり、クラウン（帽子の山の部分）の中央がくぼんだホンブルグ型が多い。

中折帽　なかおれぼう

柔らかいフェルトで作られた帽子で、山高帽の山の部分の中央にくぼみを入れてかぶるところから、中折帽と呼ばれる。フェルト・ハットのうち、堅く仕上げたものを山高帽、柔らかく仕上げたものを中折帽またはソフト帽という。中折帽で最も高級なものは、ホンブルク Homburg という、ドイツの産地名をつけた帽子で、19 世紀末、イギリスのエドワード 7 世が皇太子時代にかぶったことから広まった。

パナマ帽　パナマぼう　Panama hat

ブリムの小さい日よけ帽。男女ともに用いられる。もとはイギリス人が熱帯地方や南アメリカでかぶっていたもので〈開拓者の帽子〉ともいう。約 300 年前ころからエクアドルで用いられていたが、1890 年ころ他国にも広がって流行し代表的な夏の帽子となった。精選したパナマソウの若葉を刈り取り、細かくさいて乾燥したものを編んでつくる。機械と手編があり、手編は 1 週間から数ヵ月を要するため品質による価格差が大きい。最高品はエクアドル産で、ほかにコロンビア、ペルー、パナマ産のものがある。名称は売買市場パナマにちなむ。

ハンチング

ハンチング・キャップの略で鳥打(とりうち)帽のこと。本来は狩猟用の帽子であるが、現在はスポーティーな帽子として広く用いられている。六つはぎ、八つはぎ、一枚天井などがあり、ウール、綿、麻などで作られる。

角帽　かくぼう

大学生のかぶる帽子。1886 年、東京大学が帝国大学と改称し、学生の制服を定めたとき、以前に和田義睦、山口鋭之助の 2 学生が提案して許可され有志がかぶっていた帽子を、制帽として採用した。頂上が四角であるところからこの名がつけられ、明治時代には角帽は帝国大学生の異名であった。欧米の大学の礼装帽を模したといわれるが、前面のつばは日本独特のもの。校章は〈大学〉の文字をデザイン化したもので、東京帝国大学以外の帝大もそれに準じ、以降に設立された官立単科大学もほぼ同様であった。また、多くの私立大学も角帽を採用した。

昭和モノ語り

中

牛乳

健康・強制 重なる戦後

「滋養とらないと、なおりが遅いよ」

胸を患う娘に向かい、母がそう諭して牛乳をコップで差し出す。そんな光景が向田邦子の小説『あ・うん』（新潮文庫）に出てくる。舞台は昭和10年代の東京。

その下町で育った戸板女子短大学長の江澤郁子さん（73）＝栄養学＝は「牛乳を飲んだのは主に病人。飲みたくてもほとんど飲んだことはなかったですよ」と少女時代を回想する。牛乳は、貴重な滋養の源だった。農林水産省によれば、当時の国内生乳生産量は1日に758トン。現在のわずか3・4％に過ぎない。

△ △

それをガラッと変えたのが戦後の学校給食だ。敗戦直後に急増した栄養失調の子どもたちを救うため、連合国軍総司令部（GHQ）などの協力で援助物資を得て、脱脂粉乳が登場する。

水分と乳脂肪分を飛ばしてできた粉末を、固まらないよう低温でゆっくり溶かす。バケツからアルミのおわんに注がれるそれは、薄くてぬるくて、まずかった。米国の余剰物資だった小麦粉から作られたパンと脱脂粉乳の給食は、多くの子どもたちが出あった最初の「西洋」ともいえたが、栄養優先という意味では戦前の牛乳と同じだった。

経済復興が進むにつれ、牛乳のある風景は、街へも広がった。

評論家の唐沢俊一さん（48）は、戦後の庶民の暮らしの光景といえば、昭和31年公開の映画「牛乳屋フランキー」を思い浮かべる。フランキー堺扮する牛乳配達の青年がライバル店を打ち負かすコメディー。青年は両手に持った牛乳びんをクルクル回し、家々の牛乳箱へ鮮やかに投げ入れていく。そこに「前近代的な食生活が戦後にアメリカナイズされた変化の典型」を見てとる。

脱脂粉乳が学校給食からほぼ姿を消すのは昭和40年代までかかる。その間、牛乳消費量は、昭和30年に1日あたり1325トン、40年には4853トンと右肩上がりに増え、次第にありふれた存在となった。

普及とともに製法も進化し、味も向上。流通の形態も宅配から店売りに変わった。一方で、「完璧に近いほど、栄養バランスの優れた食品」（江澤さん）といわれるだけに、「体にいいのだから、残さず飲もう」という強制性も強かった。

たとえば、さくらももこが昭和40年代末の静岡での少女時代を描いたアニメ「ちびまる子ちゃん」（フジテレビ系）。「『冬の牛乳』の巻」で、冷蔵庫に余った牛乳を勧める母に対し、まる子たちは「腹がゴロゴロ鳴る」「ムリやり飲ませないでよ」などと言って嫌がる。

昭和51年には全国の小学校で米飯給食が始まった。白ご飯に牛乳。奇異にも映るこの取り合わせは、戦後日本そのものの到達点だったのか。ただ、ご飯の日には飲み残しが多かった記憶もある。残飯入れのバケツの中、白ご飯が浮いた牛乳の海……。昭和の終わりごろには、すべて食べよと強要する指導は主流でなくなったようだ。

△ △

ある時期まで牛乳は飲み物をリードする存在でもあった。「牛乳びん」「牛乳パック」と、新顔の容器の名称は「牛乳」の文字を冠して登場してきた。「時代の先端の工夫がまず牛乳に対してなされていた証し」と唐沢さんは説明する。

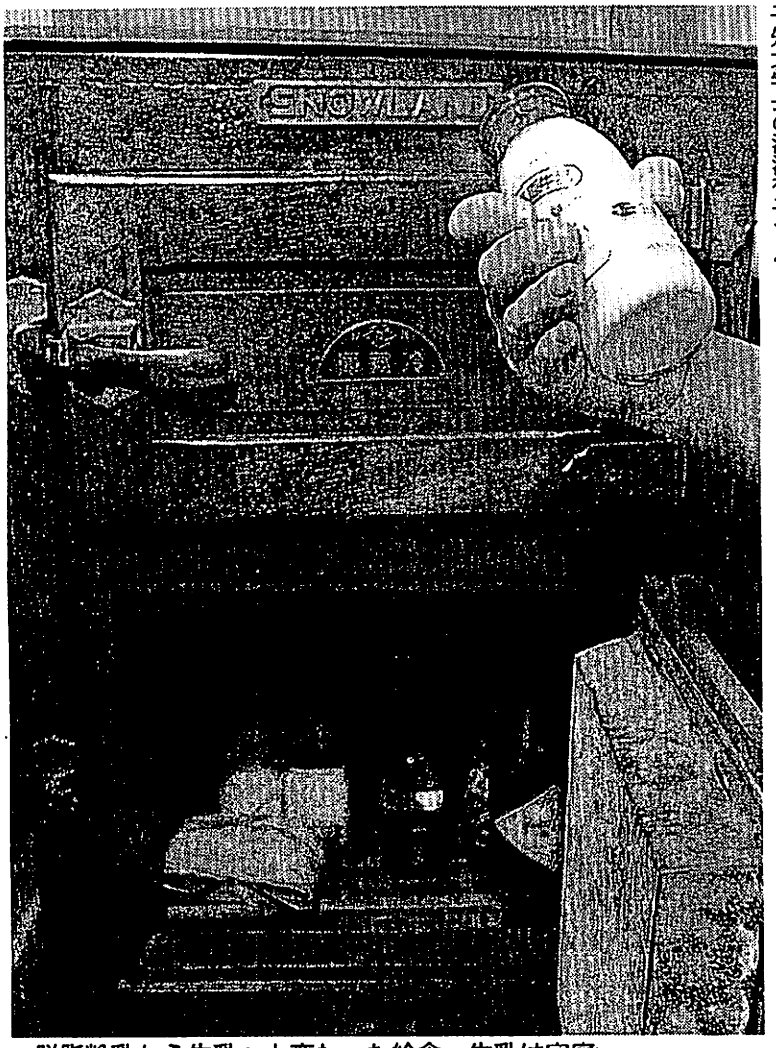
西日の差す部屋で恋人が冷蔵庫を閉めた後に、「パックのままの牛乳かかえ身軽な動作で運んでくれるわ」――。昭和52年のヒット曲「イミテイション・ゴールド」（阿木燿子作詞）で山口百恵はそう歌った。牛乳はまだ、都会の恋愛の小道具としても違和感のない存在だった。

そうした立場は今や清涼飲料水に取って代わられた。ペットボトルの牛乳版が発売されるのは早くても今年の秋だという。

また、「牛乳の飲み過ぎは骨粗鬆症を招く」などと記した医師の著書がベストセラーになり、牛乳業界が抗議する事態も起きていて、不変と思われていた「健康」のイメージさえ最近は揺さぶられている。牛乳の消費量は13年前を頂点に減る傾向にある。

牛乳ほど昭和、とくに戦後になって飲まれるようになったものはない。戦争からの解放感とも結びついた健康的なすがすがしさと、その押しつけへの嫌悪と。戦後の日本人にとって、牛乳のこの二面的なイメージは、進んでいく欧米化への複雑な感情と重なり合ったのかもしれない。

（新谷祐一）



脱脂粉乳から牛乳へと変わった給食。牛乳は家庭の冷蔵庫にも姿を現すようになった＝東京都大田区の「昭和のくらし博物館」で、遠藤真梨撮影

出典の表記方法

1.　日本語文献（単行本、雑誌論文・記事など）の場合

- 標準的な順序は、①執筆者名、②タイトル（書名、論文名）、③出所を特定するためのデータ（出版社名、雑誌名、発行年、参照ページなど）、である。
- 書名は『　』で、論文名は「　」で囲む。
- 単行本の場合：執筆者名『書名』出版社、発行年（、参照ページ）。

  【例】溝上慎一『大学生の学び・入門』有斐閣、2006 年、72～75 ページ。
- 雑誌論文・記事の場合：執筆者名「論文名」『雑誌名』巻号数、発行年月（、参照ページ）。

  【例】香山リカ「若者はなぜナショナリズムに惹かれるのか」『クレスコ』第 58 号、2006 年 1 月、5～7 ページ。
- 単行本に収録された論文の場合：執筆者名「論文名」（編著者名）『書名』出版社、発行年（、参照ページ）。

  【例】内海愛子「エビ養殖のメッカ・台湾」鶴見良行・村井吉敬『エビの向こうにアジアが見える』学陽書房、1992 年、206 ページ。
- 新聞記事の場合：（執筆者名）「記事名」『新聞名』発行年月日、朝夕刊別・面数。

  【例】「国民投票方案現在の内容なら…　改憲手続どう進む」『朝日新聞』2007 年 4 月 14 日、朝刊 3 面。
- 同じ文献から 2 度目に引用する場合は、「前掲書」「前掲論文」などの語を用いて、上記②③の項目を省略できる。ただし指し示すページが違う場合は、ページ数を改めて記す。

  【例】溝上慎一、前掲書、120～121 ページ。
  　　香山リカ、前掲論文、9 ページ。
- 中国語・朝鮮語の文献も日本語文献に準ずる。

2.　欧文文献の場合

- 標準的な順序は日本語文献と同じ。
- コンマ（,）、ピリオド（.）などを用いて区切る。句読点は使用しない。
- 書名・雑誌名はイタリック体（斜体）で表記し、論文名は“　　”で囲む。
- 単行本の場合：執筆者, 書名(出版地: 出版社, 出版年), ページ数.

  【例】Charlotte Marcus et al., *Investigation into the Phenomenon of Limited-Field Criticism* (Boston: Broadview Press, 1990).
- 雑誌論文の場合：執筆者, “論文名,” 雑誌名, 巻号数(発行年月): ページ数.

  【例】Jane R. Bush, “Rhetoric and the Instinct for Survival,” Political Perspective 29 (March 1990): 45-56.

3.　ウェブ・ページ

- （作成者・執筆者名）、記事・ページ名、サイト名、URL アドレス、作成・更新日またはアクセス日、の順に記す。記事名は「　　」で、URL アドレスは（　　）でくくる。

【例】「教育基本法について」文部科学省（http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/houan.htm）2007 年 1 月 31 日アクセス。

「日本の食糧輸入（2004 年・2005 年）」ジェトロ（http://www.jetro.go.jp/jpn/stats/trade/pdf/2005_import_1.pdf）2007 年 3 月 15 日アクセス。

4. 最近の出典表示

- 参考文献リストと対照させ、本文中に著者、出版年、ページ数を括弧書きする形式で出典を表示する方法が最近増えている。この場合、参考文献リストでは、執筆者名の後に発行年を（　　）でくくって挿入する。

【例】本文中に

（溝上 2006：72～75）

と記載されていた場合、参考文献リスト中の「溝上」という人物が 2006 年に執筆した文献の 72～75 ページを出所とするという意味。このとき参考文献一覧表には、次のような形式で文献がリストアップされていなければならない。

溝上慎一（2006）『大学生の学び・入門』有斐閣